

シンポジウム「北海道の草地農業におけるマメ科牧草栽培の意義」

課 題 の 背 景

川 端 習太郎 (北農試)

わが国の農業生産のために消費される石油および電気エネルギーの約3分の1は、肥料生産のために使われ、その約2分の1は、窒素肥料生産に費されているという。きわめて大雑把な計算ではあるが、窒素肥料の生産には莫大なエネルギーを必要とすることは確かである。最近の石油国際価格の低下に加えて円高傾向による国内エネルギー価格の安値という条件下にあるとは言えども、稲や園芸作物に比べて、土地生産性の比較的低い牧草では、とくにエネルギー多投型からの脱皮をはかることは、きわめて重要な課題である。マメ科牧草は、1年、1 haあたり100～200 kg、条件がよければそれ以上の空気中窒素を固定し、それによってマメ科牧草自体の生産が行なわれ、さらに余剰分は、隣接作物や後作物が利用するわけで、このような観点から、マメ科牧草はきわめて重要である。

一方、マメ科牧草は、家畜生産の面からも、イネ科牧草にくらべて、その栄養価や消化性などについて、いくつかの優点が認められ、牧草による家畜生産性の向上をはかるうえに、きわめて重要と考えられる。

しかし、マメ科牧草は、イネ科牧草にくらべて、栽培ならびに維持管理がむづかしく、マメ科牧草の能力を十分に発揮させるには、今後になお問題を残していると考えられる。

このような背景から、今回、土壤肥料の立場から、マメ科牧草の栽培、維持管理技術を、家畜飼養の立場から、家畜飼養上のマメ科牧草の意義についてそれぞれ話題を提供していただくことにした。マメ科牧草の重要性を再認識し、その有効な利用を考えるうえに有益な討論が展開されることを期待したい。